

ある日の土曜日――

「むゝ…また散らかってる…」

ちよつとした用事でやってきた理奈ねーちゃんに
部屋の中を見られてしまった。

「いやー…ここ数日ゲームにハマってる」

「じゃあ私が片付けちゃう!!
ほらほら、こんな所にペットボトル転がしてたら
転んじやうんだから」

「あ、後でやっつくつてば」

また世話焼きスイッチを入れてしまった。
そこら中に散乱してるモノを片っ端から拾っていく理奈ねーちゃん



「ん…なんかこれ…」

「ああつーいや、ちよ、それは…」

「理奈ねーちゃんが手に取ったのはエロ同人誌だった
固まる僕をよそに無言でページをめくりだす
理奈ねーちゃん」

「わ…ええつ…こんな事まで…?」

「も…もうそんな見なくていいって!」

「…ふーん…たあ君みたいな真面目な子も
こういうのに興味あるんだねえ」

「ちよ、ちよと買ってみただけで…」

「子供のころからずっと知ってる仲なだけに
母親に見つかったかのように動揺してしまう」



「ま、男の子だし仕方ないよね
でもちよつと過激じゃないかなあれ」

「え、えつと…その…」

「ま、たあ君のお母さんには内緒にしといてあげる」

「理奈ねーちゃんはちよつと悪戯っぽい笑みで僕を見た」

「さ、それより掃除掃除！本格的にやつちゃうよお」

「僕はどうしていいかわからず
彼女のペースに巻き込まれて行ってしまった」



「たあ君、いま何時？」

「えっと、3時半」

「そっか、間に合ってたよかった
5時からちよっと出かけるから」

「そうだったの？」

「じゃあ僕の部屋なんてほっといて
用意してよ。なんか悪いよ」

「平気平気。」

「ちよっと人と会うだけだし。」

「それにたあ君の散らかった部屋
放っておけないもん」

「ありがとう理奈ねーちゃん…
なんて優しいんだ。」

「そして今日は…白いのがはみ出てるよ…」

「理奈ねーちゃんのむっちりとしたお尻を包む
薄い布…一度でいいから全部見たい…」



「シャワー浴びてないのに
イイの...?♡」

「むしろそれがいいんだよ
しっとり蒸れてさあ」

「や、やだもう...
さっきまでお掃除してて
汗かいたから...」

「すは...すは...
理奈の匂い興奮する♡
ホラもつと腰振って」

「陽くんは変態だなあ
えい♡えい♡」

むちゅ...♡♡♡
じゅく

むにゅ

むちゅ...♡

ジュ

ジュ

じゅん

じゅん

じゅん

んっ♡

んっ♡

きもちい?♡♡♡



「ほらほら頑張れっ♥
今日もセックスするために
俺んち来たんだろっ」

「んっ♥ん♥
陽くんのちんちん、
理奈の蒸れ蒸れのおしり、で
気持ちよくなってる♥」

「うっほお…♥
パツコキと尻コキ
同時に味わえて
さいっこい★」

ぬち

くっくっくっ

いっしょ
いっしょ

いっしょ
いっしょ
いっしょ

いっしょ
いっしょ
いっしょ

へーへー

んっ
んっ

んっ

きもちい？

私はもう、彼とのエッチが
毎日の楽しみになっていた。
エッチしてくれるなら
どんな恥ずかしい要求にも
答えられる…



どろろ

ぶるるるるっ♡

はっ♡

は、♡

はあ♡

はあ♡

あふっ♡

「ふああっ♡
あったかいの出てる♡

理奈のおパンツの中、
陽くんの精液で
ぬるぬるにしてえ♡」



恥ずかしいお尻の穴の
入り口の方を浅く刺激されて
ぞわぞわとした快感に
戸惑ってしまう私

「だめっ...♡
ほんとに...♡ああッ
だめええっ♡♡」

「ダメダメ言う時は
感じてる時だよなあ？
イけイけ♡」

あッ♡
だめ♡
ほんと♡

いっ♡
ぐ♡
ぐ♡

はっ♡

はあ♡

は、♡

ガク♡
ガク♡
ガク♡

「ち♡ちが...あッ♡
お♡お尻のアナ
いじられながら
イっちゃうッ♡♡♡」

きゅ♡
い♡

いっ♡
いっ♡
いっ♡





「おーら、お待ちかねのおチンポだぞお♡」

「はぁぁあん♡おちんぽしゅき♡」

「うちもそのうち開発しようねー」

「ひっ♡だめ♡」

「そこだめ♡」

「恥ずかしいからあ♡」

「うちから丸見えなの知らなかった？
弄って欲しいのになって」

びっ♡ びっ♡

びっ♡

ためえ♡

あ♡

はっ♡

はっ♡

はぁ♡

はぁ♡

ん♡

「ち♡ちが…あっ♡
お♡お尻のアナ
いじられながら
イっちゃう♡♡♡」

あ♡ひっ♡あ♡

ぬち♡ぬち♡ぬち♡

あ♡

いっ♡